

「万博」はどのように経験されたのか？⁽¹⁾

—長久手町住民意識調査を中心に—

松 宮 朝⁽²⁾

1. 「万博」はどのように経験されたのか？

愛知万博閉会から1年が過ぎた。万博開催前には環境問題や、万博そのものの成功について様々な危惧や不安の声が上がっていたものの、目標としていた1,500万人を大きく上回る約2,205万人が訪れたことにより、そのとりあえずの「成功」が語られているようだ。こうした「成功」の語りに連動するかのようになり、万博での成果を継承していこうとする動きが愛知県各地で目立つようになってきている。環境、市民参加、国際交流など、万博をきっかけに生まれた成果をどのように継承できるかという点から、万博理念の継承をうたった様々な取り組みが進められつつある段階といえよう⁽³⁾。ただし、ここで注意しなくてはならないのは、来場者数という点から万博の事業としての「成功」が語られているもの（その一方で、愛知県財政問題、環境問題などが指摘されているのも事実だが⁽⁴⁾）、これらの動きが万博での理念の共有などに対する検証作業を踏まえたものではない点である。いわゆる「万博後」に進められている取り組みは、万博を通じて、何らかの意識、理念の共有がなされたことを前提にした動きであるのだが、こうした動きの前提が自明のものとしてされているのに比して、これまで「万博」を経験した人たちの経験がどのようなものだったのか、そしてどのような評価がなされているのかといった点に関する検証がなされているとはいいがたい。

本稿は、こうした「万博」経験の一端を明らかにすることを目的としている。ここで重視したのは、「万博」に関する評価、特に意識調査を中心に、「万博」の経験に関する意識構造を探るという点である。これまでの「万博」に関するまとまった研究成果としては、一橋大学社会学部町村ゼミナール編（1999, 2002, 2005）、町村・吉見編著（2005）など、開催されるに至ったプロセスの分

析から万博開催の持つ意味までを総合的に問う研究成果が存在している。また、加藤晴明・岡田朋之・小川明子編（2006）など、「万博」経験を総合的に問う研究成果も現れつつある。本稿執筆時（2006年10月）では、こうした研究成果が公開されつつある段階ではあるが、地元住民が万博開催後、「万博」での経験をどのように評価しているのかという点については、まだまだ十分な検証作業が行われていないように思われる。そこで、特に、地元住民からどのように「万博」が経験され、どのように評価されたのか、その地道な確認作業を行っていくことにしたい。これは、いわゆる「万博」の「成功」という語りの内実を検証する作業である。

2. 「万博」経験はどのように語られてきたのか？⁽⁵⁾

2-1. 「万博」をめぐる論点

「万博」、そして「万博」の経験について、これまでどのように語られてきたのだろうか。ここでは、まず、これまでの代表的な「万博」に対する語りのパターンをみておくことにしよう。

吉見俊哉によると、愛知万博がいかに開発の問題を引きずり、環境破壊をもたらしたのかという点とともに、万博会場の変更など面において、開発主義の転換をうながす「市民参加」が打ち出されたことを指摘する。環境保護や、万博開催の方針をめぐる市民参加の形態について、愛知万博以前と比べて、万博開催計画が社会に公表された際の反応において、「開発」による「自然」破壊への批判が生じた点が特色であるとされ（吉見，2005:30）、また、愛知万博は、「莫大な公共事業投資と結びついた国家プロジェクトとしての万博に、この列島の人々の欲望が大々的に動員されていくシステム」としての「万博幻想」の終焉と、「新しい主体形成」の始まり（同上:192）による「市民参加」の拡大の可能性が展望されている。これは、加藤（2006:244）が指摘する「万博をめぐるドミナント・ストーリー」とみることができるかもしれない。こうした「万博」にまつわる「環境意識」、「市民参加」という「ドミナント・ストーリー」について、もともとの吉見による議論の文脈に依拠しているわけではないが、少なくとも、公式には、万博の「成功」と、万博開催後の「市民参加」、「環境

意識の高まり」などの継承が唱われている。万博後に出版された書籍としては、小川ほか（2006）による万博プロデューサーの立場からの記録、クリスティーヌ（2006）によるフレンドシップ事業の報告、大前編（2006）による地球市民村スタッフの記録などがあるが、いずれも、こうした「成功」の語りをうちだすものだ。

その一方で、海上の森を守る会（2006）では、万博の影響に対する懐疑的な立場から、①万博開催中の入場者に関する詳細なデータ、②財政問題、③リニモの問題、④跡地利用、生態系復元、⑤中部新空港・前島問題、⑥万博の経済波及効果、⑦環境問題など、総合的な万博の決算書を明らかにすることを求めている。これらについては、行財政、開発施策などを含めた総合的な評価が必要となる点である。

本稿では、①経済効果、地域振興、②環境意識、③市民参加、④総合的な「万博」経験という4点から既存研究、既存資料をもとに概観しておくことにしたい。ここから、本稿での分析する際のポイントについても示しておきたい。

2-2. 経済効果、地域振興

共立総合研究所の試算によると、万博による東海3県の経済効果は1兆2,800億円、うち消費関連は4,500億円とされている⁽⁶⁾。この他にも、万博による経済効果の指摘が愛知県の景気回復の動きと結びつけられて語られている（日本経済新聞社編，2006）。また、万博に伴う公共事業によるインフラ整備の効果や経済効果についても多様な形で議論されている状況だ（中日新聞社・UFJ総合研究所編，2005）⁽⁷⁾。

こうした経済効果について、名古屋市商工会議所による2005年10～11月にかけて、名古屋市内に事業所を持つ企業3,200社を対象に行った調査（有効回答率26.2%）では、1997年に万博が愛知で開催されることに決定した当時の賛否については、「賛成だった」が85.2%、「反対だった」が10.0%であったが、万博が終了した現在、万博の開催は地域にとって成功だったかという点については、「成功だったと思う」とする企業が94.4%、「失敗だったと思う」とする企業が1.2%となっている。万博の開催が「成功だったと思う」と判断する理由については、「知名度・地域の理解度の上昇」が79.8%で最も多く、「地域にお金

が落ちた」が55.8%、「インフラ整備で都市としての魅力向上」が54.4%、「『自然の叡智』というテーマ訴求の達成」が48.7%、万博が地元企業に利益をもたらしたかについては、「非常に利益があった」と「利益があった」との回答を合わせると29.3%となった。逆に「あまり利益がなかった」と「利益はなかった」との回答を合わせると66.9%となり、「利益があった」とする企業を大きく上回る結果となっている（名古屋市商工会議所，2005）。また、瀬戸市商工会議所中小企業相談所による小規模事業者に対するアンケートにおいても、期間中の売り上げ「減少」が48.0%、「横ばい」39.1%となっており、期待された経済効果が少なかった点が明らかになっている⁸⁾。

このように企業の側からの実感としては、それほど高い効果が感じられたわけではないようだが、経済効果による地域振興については高い評価の声が支配的だ。たとえば、地域振興について愛知県産業労働部観光交流課観光振興グループの渡邊宗徳氏は、万博により、「2005年日本国際博覧会協会の調査によれば、来場者のうち愛知県居住者が43.8%であり、県外来場者が56.2%と推測できることから、それまで県内観光中心型の愛知県の観光特性を大きく打ち破るもの」であり、例年より約2倍の外国人が愛知県を訪れたことから、愛知県の観光にとって大きな成果と評価している（渡邊，2006:71）。こうした語りに象徴されるように、万博の効果はあらゆる点で喧伝されることとなった。

もっとも、こうした動向に対する批判がないわけではない。説得的なデータをもとにした懸念の声も存在している。代表的なものとしては、公共事業による財政負担、リニモの存続の問題などであろう（宇佐見，2006）。この点と関連して、万博理念継承の流れの中で、県税収の増大も観られているものの、県債残高約3兆8千億円にのぼる財政硬直化は依然として解消されていないのである。愛知県の財政問題の深刻な状況は無視できるものではない（早川，近刊）。本稿では、実際の経済効果という点ではなく、万博を経験した人々にとって、経済効果の期待、地域活性化への期待と、財政難への懸念、そして次に述べる環境への影響をどのように認識していたのかという点から探っていくことにしたい。

2-3.環境意識

万博開催前については、予定された海上会場におけるオオタカ問題や、環境

アセスの問題が多く議論を呼び、こうした議論が会場計画の変更をもたらしたことが明らかにされている（町村・吉見編著，2005）。これに対して万博開催後では、万博期間中約21万5千人が参加したエコマナーなど「環境意識」の高まり、環境保護の取り組みの推進などが、「万博」を評価する言説の中心となっているようだ。この点についてはすでにいくつか調査が行われている。博覧会協会による「環境Webアンケート」では、「環境意識」の高まりと環境配慮行動への影響力が示されている⁹⁾。また、「(財)2005年日本国際博覧会協会テーマの理解度・浸透度アンケート調査」では、「環境意識」の高まりや、環境行動への展開が明らかにされつつある¹⁰⁾。万博の会場の一部となった海上の森を、「海上の森センター」として環境学習の拠点とすることが決まっているように、万博理念の一つである「環境意識」を高める活動の継承も行われている¹¹⁾。

ただし、実態としては、「環境万博」の綻びも吹き出しつつある。博覧会協会による調査の結果、会場で排出された可燃ゴミ、不燃ゴミを除く分別ゴミの割合が、当初目標の66.5%を下回る56.5%となった¹²⁾。また、加藤（2005）は、リサイクル率75%という公式見解が、実際57%にすぎず、43%が焼却処分なってしまう点を指摘している。

このように、「環境意識」の高まりという「成功」の語りとともに、実際の環境負荷などに対するシビアな検証も実施されている状況だ。ここから、環境との共生に対するアンビバレントな評価（芹沢，2005）が想定されるわけだが、本稿では実際に万博による環境意識への影響をどのように評価したのかという点から探っていくことにしたい。

2-4.市民参加

次に、「万博」による「市民参加」の評価について見ていこう。瀬戸会場での市民参加プロジェクト参加者が約3万5千人と、愛知万博の成果としてしばしば語られる「市民参加」であるが、この「市民参加」理念についてはどのように評価されているのだろうか。

そもそも、万博開催中に、目標の約2倍となる3万人を超えるボランティアの登録があった。2005年9月に実施されたボランティア登録者に対する郵送調査（配布数1,676、回収数1,046、回収率62.4%）では、ボランティア活動の頻度

については、「週1～2日」51.0%、「月に1回程度」32.3%となっている。今後のボランティア活動移行「今後も関わっていきたい」74.5%であり、愛知万博でのボランティア活動が地域に良い影響を与えていると考えている率は、「思う」、「少し思う」合わせて9割を超えている（愛・地球博ボランティアセンター編，2006）。こうした点が、万博による「市民参加」の拡大という語りの1つの根拠となっていると言えよう。

「市民参加」という理念継承は、様々な施策の形でも生かされている。万博閉会間際の2005年9月22日に開催された「万博開催地サミット2005 in愛知」において、「愛・地球博ボランティアセンター」経営企画委員長によって、「愛知にボランティア拠点」の提案がされている⁽³⁾。長久手町においても「おもてなしボランティア」の継承⁽⁴⁾、市民プロジェクト「『とき』を祝うメモリー」を手がけたメンバーによるNPO法人設立の動き⁽⁵⁾や、2006年1月17日には、ポスト万博の長久手町のあり方を考える住民有志による「長久手・町づくり勉強会」が開かれるといった動き⁽⁶⁾がある。また、愛知万博に参加した約3万人のボランティアをまとめた「愛・地球博ボランティアセンター」がNPO法人を取得し、愛知万博の理念の一つである「市民参加」を実践的に継承していくことを模索している⁽⁷⁾。

このような万博における「市民参加」がどのように評価されているのかという点について検証を行っていくことにしたい。

2-5.総合的な「万博」経験

最後に、総合的な「万博」経験の実態を扱った先行研究についてみておこう。博覧会協会の入場者調査では、「性別、年齢を問わず幅広く来場し」、「大阪花博」（1990年）や「つくば科学博」（1985年）に比べ、「愛・地球博」への地元来場者の比率は低く、「全国各方面から来場した」ことが示されている。「万博」の満足度に対しても、約80%の人が「よかった」と回答している⁽⁸⁾。これが主催者の立場からの公式の「万博」経験に関する記録である。その他にも、「万博」に対する愛知県、および名古屋市住民による評価についての調査結果が公表されている。2005年11月に実施された、愛知県の県政モニター498人を対象とした郵送調査（有効回収数482、回収率96.8%）では、「愛知万博に行った」83.2%で、

行った人のうち1回が34.7%、2～4回が40.3%、5～10回が15.5%、11回以上が9.5%となっている。特に60代以上で、参加回数が多くなっている。「万博」に対する評価としては、「よかった」47.1%、「まあまあよかった」40.6%となっている通り、極めて高い評価が行われていた（愛知県県民生活部広報広聴課，2006）。また、2005年11月に実施された名古屋市の市政アンケート（回答者1,027人）、および2005年10月に実施されたネットモニタアンケート（回答者461人）では、「2回以上行った」が40.8%と53.8%、「1回行った」が29.6%と27.5%であり、万博を通じて評価できる点については、自然環境保全と継承について26.2%と39.9%、国際交流・国際理解について47.3%と58.0%、市民参加について44.2%と50.8%、科学技術について57.1%と68.1%、「評価できることはない」が7.0%と6.9%となっている（名古屋市総務局国際博覧会推進部国際博覧会推進室編，2006）。これらの住民意識調査からも言えることは、「万博」を経験した多くの参加者による満足度の高さである。

その他、愛知万博開催中の調査研究としては、愛知県国際推進局編（2006）、豊田市総合企画部国際推進課編（2006）、長久手町編（2006）、名古屋市商工会議所編（2005）、名古屋市総務局国際博覧会推進部国際博覧会推進室編（2006）など公式の記録が出版されている。これらは、万博開催中の丁寧な記録として重要な意味を持ち、また、「万博」に対する評価を行う上で貴重な資料である。しかし、万博での環境意識の高まり、「市民参加」の実現、そしてこれほどまでに多くのリピーターを生み出したものは何であったのかなど、「万博」の評価に関する調査・分析は、本稿執筆時においてそれほど多く出されているわけではない。

こうした中で、注目されるのは、加藤晴明・岡田朋之・小川明子編（2006）である。編著者の一人である加藤は、「万博」が「市民参加万博」、「環境万博」といった公式の見解でのみとらえられることに疑問を投げかけている。「こうした公式のラベリングは、万博後に＜理念の自立化＞といえるような発酵現象を生み出し、行政主導のさまざまな理念継承活動を逆規定している」という問題があるため、＜万博を生きた人々の経験＞をとらえることを提唱する（同上：12-13）。そして、＜万博を生きた人々の経験＞を11の物語として記述するとい

うのだ。ここでの11の物語とは、①「万博マジック」、②「シニア万博」、③「リピーター万博」、④「万博というオーラ～期間限定のメタテーマパークの強さ～」、⑤「マイ万博～国家の万博から個人の万博へ～」、⑥「一人万博～一人ひとりの物語の誕生～」、⑦「かまってくれる万博～個人個人に向き合ったケア～」、⑧「おしゃべり万博～「交流」、それは語り合いの社交場～」、⑨「ライブ万博～音楽空間と演劇空間が青春を呼び覚ました～」、⑩「自己物語の生成装置としての万博～体から心へ～」、⑪「愛知だけ万博」である。この研究成果は、「万博」の意義や経験を、生きられた姿のままとらえようとする点で意欲的な試みと言える。また、ここで出された視点は、「万博」経験をめぐる本稿での調査データ分析する上でも参考になるものだ。なぜなら、メディア等で流布されている「万博」の「成功」の語りに関して、その内実に迫ろうとする視点を提供しているからである。

本稿では、こうした万博開催後の研究成果を踏まえつつ、愛知県立大学地域連携準備室を中心に、「万博」評価に対する意識調査を実施した。これまでまとめてきた論点を踏まえ、次節からはこれらの調査データから浮かび上がる「万博」経験の検証作業を行っていききたい。

3. 「万博」に関する意識調査から

3-1. 調査の概要

前節で示した研究視点のもと、万博閉会から約3ヶ月を経た段階において、以下の4つの調査を実施している。①愛知県立大学学生調査（調査対象：愛知県立大学学部生、調査方法：一般教育科目35教科において配布→回収、調査期間：2006年1月15日～2月4日、有効回収票：1315票）、②長久手町住民調査（調査対象：長久手町民500名（長久手町選挙人名簿より系統抽出）、調査方法：郵送法、調査期間：2006年1月28日～2月22日、有効回収票：292票、回収率58.4%）、③長久手南小学校調査（調査対象：小学生児童5,6年生、保護者、教員、調査方法：教員を通じて配布、調査期間：2006年1月28日～2月22日、有効回収票：小学生児童262票、保護者440票、教員34票）、④白鳥小学校調査（調査対象：小学生児童5,6年生、保護者、教員、調査方法：教員を通じて配布、調査期間：2006

年1月28日～2月22日、有効回収票：小学生児童170票、保護者278票、教員20票)の4つである。愛知県立大学生調査は、筆者の本務校であるという理由とともに、万博会場から最も近い位置にある大学であることから対象として設定した。また、③と④の小学校を対象とした調査については、長久手南小学校が長久手町内にある小学校であること、白鳥小学校（名古屋市熱田区）は比較対象の意味も込めて調査対象として選出している。

ここでは、特に長久手町住民調査を中心に、愛知県立大学生、長久手南小学校保護者、白鳥小学校保護者の調査データ⁽⁹⁾との比較を行いつつ、分析を行っていきたい。

3-2.調査結果の概要

本調査でまず注目されるのは、長久手町住民調査における58.4%という有効回収率の高さだろう。この回収率の高さは、単純化された（逆に単純化しすぎた面もあるかもしれないが）質問紙による回答のしやすさとともに、長久手町住民の万博への関心の高さと考えられるのではないか。また、調査実施時に、愛知県や長久手町が万博後の取り組みに動き出していたことから関心の高さにつながり、この回収率の高さに結びついたといえるかもしれない。

回答していただいた方々の属性は以下の通りである。

表1：性別

	男性	女性	DK.NA.	計
度数	98	192	2	292
%	33.6	65.8	0.7	100.0

回答していただいた方は、約2/3が女性となっている。

表2：年齢

	20代	30代	40代	50代	60代	70代	DK.NA.	計
度数	43	71	50	63	47	11	7	292
%	14.7	24.3	17.1	21.6	16.1	3.8	2.4	100.0

世代的には30代、50代が多くなっている。

表3：居住地域

	大字のつかない地区	大字長湫	大字岩作	大字熊張・前熊	DK.NA.	計
度数	134	80	35	26	17	292
%	45.9	27.4	12.0	8.9	5.8	100.0

回答していただいた方の居住地は、長久手町西部に位置する新しい住宅地「大字がつかない地区」が45.9%となっている。

表4：現住所での居住年数

	10年未満	10～19年	20～29年	30～39年	40～49年	50～59年	60～69年	70～79年	DK.NA.	計
度数	100	61	74	21	12	8	12	1	3	292
%	34.2	20.9	25.3	7.2	4.1	2.7	4.1	0.3	1.0	100.0

居住年数については10年未満が34.2%と最も多い。

3-3. 「万博」に対する評価

まずはじめに、「万博」に対する評価から見ていこう。

表5：万博評価（開催前）

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
よい	—	20.2	20.0	17.6
どちらかといえばよい	—	22.6	30.2	36.7
どちらかといえばよくない	—	42.5	41.6	34.2
よくない	—	13.7	7.3	10.4
DK.NA.	—	1.0	0.9	1.1

注：単位は%

表5に示したとおり、万博開催前には、「良くない」（13.7%）、「どちらかといえば良くない」（42.5%）と、半数以上が否定的な評価を下していた点が興味深い。長久手南小学校保護者、白鳥小学校保護者でも同様の傾向である。この否定的な予測はどのような理由によるものだろうか。その理由については、以下の自由回答から探っていこう。表6～9は、自由回答を項目別にまとめたものである。

表6：「良い」と思った理由

地域振興	20
国際交流	12
その他	14

表7：「どちらかといえば良い」と思った理由

積極的評価	30
地域振興	24
国際交流	6
消極的評価	10
混雑・騒ぎ・迷惑	8
環境破壊	2
その他	6

「良い」、「どちらかといえば良い」という意見については、万博がきっかけとなって地域振興、国際交流に結びつくことを期待していたという理由が多い。「長久手町の活性化につながり、長久手町の知名度アップとなること、地元での21世紀最初の万博を開催することに対し、非常に期待していた。」「世界各国の生活、文化に触れる事ができると思った。」といった回答に示されているものである。

逆に、開催前の否定的な評価はどのような理由によるものだろうか。

表8：「どちらかといえば良くない」と思った理由

積極的評価	0
消極的評価	129
混雑・騒ぎ・迷惑	54
環境破壊	30
万博の内容	35
税金の無駄づかい	10
その他	19

表9：「良くない」と思った理由

環境破壊	11
万博の内容	9
混雑・騒ぎ・迷惑	8
税金の無駄づかい	6
その他	10

「良くない」、「どちらかといえば良くない」という回答の理由としては、混雑や、環境破壊に対する危惧が、大半の理由を占めている。代表的な環境に対する危惧の声を挙げておこう。「森林伐採、工事中の周辺道路の交通量増加に伴う環境悪化などで、とても不安を感じた。」「青少年公園の環境を壊し、瀬戸の山を削ってまで開催する必要があるのかと思った。」「近くに住んでいるので、

長い間公園の使用ができなくなり、交通不便で道路は渋滞し、生活に支障をきたし、開催してほしくなかった。」といったものである。これらは、自然環境、および生活環境の悪化に対する懸念と見ることができる。

このように、万博開催前には否定的な評価が多かったが、万博開催後の評価はどのようなものだったのだろうか。

開催前の評価は、積極的評価と消極的評価がほぼ半々となっていたのだが、開催後については劇的に高い評価にシフトする。万博開催後は、「良かった」（50.3%）、「どちらかといえば良かった」（36.0%）と、9割弱が肯定的な評価をしているのだ。

表10：万博評価（開催後）

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
よかった	24.0	50.3	58.6	37.1
どちらかといえばよかった	48.2	36.0	31.4	42.8
どちらかといえばよくなかった	18.4	9.2	6.6	13.7
よくなかった	7.1	2.7	0.9	2.5
DK.NA.	2.3	1.7	2.5	4.0

注：単位は%

長久手町住民、長久手南小学校保護者という地元住民は、「よかった」、「どちらかといえばよかった」合わせて9割近くである。愛知県立大学生、白鳥小学校保護者については、それより若干低い評価であるが、それでも高い評価をしているのには変わりがない。

表11：開催前の評価×開催後の評価

	よかった	まあよかった	あまりよくなかった	よくなかった	計
よい	50	8	0	0	58
ややよい	35	25	4	1	65
あまりよくない	53	59	9	2	123
よくない	8	12	14	5	39
計	146	104	27	8	285

表11で示したように、開催前の評価と比較してみると、肯定的な評価へのシフトが顕著である。開催前に「あまりよくない」と評価していた人々の大半が、そして「よくない」と評価していた人々の約半数が、万博開催後には積極的な評価へとシフトした様子を見ることができる。こうした劇的とも言える変化の理由はどのようなものなのか。その理由について見ていきたい。表12～15は、それぞれの回答の理由に関する自由回答結果を項目別にまとめたものである。

表12：「良かった」理由

万博内容のよさ	43
国際交流	24
環境意識の高まり	8
地域振興	7
その他	45

表13：「どちらかといえば良かった」理由

積極的評価	79
万博内容のよさ	27
国際交流	25
地域振興	15
環境意識の高まり	12
消極的評価	27
混雑・騒ぎ・迷惑	25
環境破壊	2
その他	19

積極的な評価としてまず目につくのが、万博で内容そのもののよさという点である。これは「万博」経験とその満足度の高さと考えられるだろう。ここではいくつか代表的な声を紹介しておきたい。「フリー券で何回も行ったが、何回行っても飽きる事がなく、外国人の方ともかまえてしまうことなく（買い物の時ぐらいですが）話をする事ができた。企業のパビリオンの技術もすばらしくて感動した。2歳の子供から94歳のおばあさんまで年齢が関係なく楽しめた。」「NEDOパビリオンだけいけなかったのが残念だが、ほとんど見た私の感想は、企業パビリオンももちろんよかったが、各国をまわるのも様々な文化の違いに触れる事ができたし、広場やエキスポドームでは毎日違うことをやるし、各グローバルコモンの広場の出し物も様々にかわるので、行けば行くほど楽しみ方、遊び方、おいしいものの食べ方などがわかって、始めから終わりまで日々色が変わっていた気がする。それが近所でも『もっと行きたかった』

と思う、退屈しない万博だったのではないか。」「身近な地域の人と遠い国の人々が頑張っている姿を見ることができ、いろいろな国の料理や文化を体験できた。良い思い出となった。」などの声に代表される。

また、「最初の計画では海上の森を会場とする案であったが、長久手会場の広さを海上の山を切り開くということは、とんでもない自然破壊になると確信しました。青少年公園を再利用してよかったと思います。」「自然環境、生活環境をみんなで考えるようになった。」「環境への意識が高まった。」という環境意識の高まりを評価する声も多い。このように、万博開催前の自然環境や生活環境破壊に対する危惧が、万博開催後には、「万博のすばらしさ」や「環境意識の高まり」によって消し去られた姿を見いだすことができる。

その一方で、数としては圧倒的に少数派であるのだが、否定的な評価の理由について見ておきたい。

表14：「どちらかといえば良くなかった」理由
表15：「良くなかった」理由

積極的評価	0
消極的評価	22
混雑・騒ぎ・迷惑	8
環境破壊	3
地域社会への悪影響	3
内容が期待はずれ	8
その他	4

混雑・騒ぎ・迷惑	2
環境破壊	3
その他	4

ここからわかるのは、開催前に危惧された混雑・騒ぎなどについてはそれほど高いウェイトがおかれていない点である。「純粹にテーマパークとしては楽しめた。しかし、万博である必要性はまるでない。外国館は、文化祭程度の出来だし、単なるお土産物屋でしかない。」「たった6ヶ月であれだけの建造物をほぼ使い捨てにし、街区整備も万博目的だけの労力、経費を思うとそれに見合った内容とは思われない。ムダな出費が多かったりニモ、長久手サテライト会場等。」「環境をテーマにしたはずの万博なのに、どんどん環境が破壊されていくのを目の前にしてショックでした。」といった内容の自由回答があったが、

生活環境破壊などの危惧と結びつけられているのは極めて少ない。開催前の評価とは対照的だ。

以上見てきたように、開催前は、懸念、危惧が多く見られたのに対して、開催後の評価は、概ね高くなっている。その中でも長久手町民、長久手南小学校保護者の高さが目につく。特に、地元住民では、様々な環境破壊、生活環境の問題を体感していたにもかかわらず、このような高い評価となっている点は強調しておくべきだろう。

さて、次に「万博」に対するイメージを見ておきたい。

表16：「万博」に対するイメージ

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
環境	23.6	29.1	36.1	35.6
文化	30.1	32.9	32.5	32.0
科学技術	23.6	15.8	20.2	17.3
進歩	8.1	9.6	5.0	7.9
その他	12.9	8.9	4.5	4.7
DK.NA.	1.7	3.8	1.6	2.5

注：単位は%

長久手町住民、愛知県立大学生、長久手南小学校保護者、白鳥小学校保護者のどれもが同じ様な傾向となっており、全体的に、「環境」、「文化」、「科学技術」がイメージされている。

表17：「市民参加」に対する評価

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
そう思う	18.0	34.2	41.1	28.8
ややそう思う	45.5	43.5	43.4	45.0
あまり思わない	28.9	17.8	11.0	23.0
思わない	6.5	3.1	2.0	1.8
DK.NA.	1.1	1.4	2.3	1.4

注：単位は%

全体的に「市民参加」が評価されており、特に長久手町住民、長久手南小学校保護者では、約8割と高くなっている。これは、「おもてなしボランティア」

などの「市民参加」を実際に経験したり、目の当たりにした機会が多かったという長久手町在住者のリアリティと言えるかもしれない。

表18：「国際交流」に対する評価

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
そう思う	31.9	34.2	46.1	33.1
ややそう思う	43.7	36.3	40.2	42.4
あまり思わない	18.5	25.7	11.4	20.9
思わない	4.9	2.4	1.1	2.2
DK.NA.	1.0	1.4	1.1	1.4

注：単位は%

「国際交流」についても、長久手町住民、愛知県立大学生、長久手南小学校保護者、白鳥小学校保護者すべての調査で約7割が評価している。

表19：「環境意識」に対する評価

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
そう思う	9.7	36.0	39.3	31.3
ややそう思う	33.0	37.7	39.1	45.0
あまり思わない	41.4	22.6	17.3	19.1
思わない	14.8	2.7	2.7	3.2
DK.NA.	1.0	1.0	1.6	1.4

注：単位は%

同様に、「環境意識」に対する評価も、長久手町住民、長久手南小学校保護者、白鳥小学校保護者は7割を越えている。ただし、愛知県立大学生のみ、半数以上が否定的な低い評価となっている。これは、通学時に経験した会場工事の環境破壊などの経験によるものと考えられる（愛知県立大学地域連携準備室編，近刊）。

以上見てきたように、「万博」に対しては、どの調査でも高い評価になっていることが注目される。この結果は、いわゆる「万博」の「成功」という語りを裏付けるものと解釈されるかもしれない。

表20：開発中心に対する評価

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
そう思う	21.0	21.2	23.4	20.5
ややそう思う	45.6	42.1	47.0	48.9
あまり思わない	27.2	30.8	26.6	27.0
思わない	3.9	3.1	0.9	1.8
DK.NA.	2.4	2.7	2.0	1.8

注：単位は%

ただし、こうした高い評価がある一方で、同時に、公共事業、開発中心であったという、地元住民からの評価があった点も見逃すことができない。どの調査においても6割以上が、万博の開発主義を指摘していることになるが、「万博」が「開発」、「公共事業」とも認識されている点と、先に言及してきた「万博」評価がどのように共存しうるのかについては、最後にまとめて考察を行っている。

この作業に移る前に、実際の万博への参加状況と、「万博」経験をみておくことにしよう。

3-4.万博への参加

表21は万博への参加状況を一覧にまとめたものである。

表21：万博への参加

万博への参加	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
行った	86.7	93.8	95.2	75.9
行かなかった	13.1	4.5	3.9	23.4
DK.NA.	0.2	1.7	0.9	0.7

注：単位は%

長久手町住民、そして長久手南小学校保護者という、地元住民の参加率は90%を越えている。

表22：万博への参加回数

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
1回	24.1	9.9	5.3	45.0
2～4回	27.5	19.0	18.4	39.4
5～9回	17.0	17.9	15.8	7.8
10～19回	13.2	20.4	23.6	5.5
20回以上	13.1	32.1	36.5	2.3
DK.NA.	5.0	0.7	0.5	0.0

注：単位は%

長久手町住民、長久手南小学校保護者のリピーター率が圧倒的に高い。どちらも、「10～19回」、「20回以上」が合わせて半数を超えている。その一方で、最も会場に隣接した場所に通っていた愛知県立大学生のリピーター率はそれほど高くない。

表23：万博への参加理由（複数回答）

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
興味があったから	53.1	63.9	—	—
近かったから	60.4	85.4	—	—
誘われたから	42.1	34.7	—	—
話題になっていたから	23.9	24.8	—	—
ボランティアのため	7.5	7.3	—	—
アルバイトのため	20.4	1.5	—	—
その他	7.9	9.9	—	—

注：単位は%

表23に示されている通り、こうしたリピーター率の高さは、やはり、「近かったため」（85.4%）という理由によるものだろう。

表24：入場券の種類（複数回答）

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
当日券（一日券）	44.9	30.7	23.2	76.1
当日券（夜間割引券）	17.5	13.5	12.9	12.2
全期間券	37.3	66.4	77.8	12.2
スタッフ証	27.6	6.6	5.0	4.7
その他	1.5	2.9	1.2	7.5

注：単位は%

長久手町住民で、全期間券での入場が66.4%、長久手南小学校保護者で77.8%と非常に高くなっている。そもそも参加時点でリピーターとしての万博参加が企図されていたことがわかる。

表25：万博への参加形態（複数回答）

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
一般客	89.6	96.7	100.0	97.7
スタッフ	31.3	10.9	9.3	5.0

注：単位は%

県大生の「スタッフ」は、アルバイトが大半を占めている。

ここでは、特に長久手町住民の万博参加回数についてやや詳しく見ておきたい。

表26：万博への参加回数×性別・年齢・居住地

		1回	2～4回	5～9回	10～19回	20回以上	計	検定
性別	女性	12(44.4)	34(66.7)	27(55.1)	42(75.0)	69(78.4)	184(67.9)	**
	男性	15(55.6)	17(33.3)	22(44.9)	14(25.0)	19(21.6)	87(32.1)	
年齢	20～40代	19(70.4)	32(64.0)	21(43.8)	34(60.7)	48(55.8)	154(57.7)	n.s.
	50代～	8(29.6)	18(36.0)	27(56.3)	22(39.3)	38(44.2)	113(42.3)	
居住地	大字のつかない地区	12(46.2)	22(44.9)	26(54.2)	29(53.7)	36(44.4)	125(48.4)	n.s.
	大字のつく地区	14(53.8)	27(55.1)	22(45.8)	25(46.3)	45(55.6)	133(51.6)	

注：()内は% ** : p<0.01

表26は、リピーター率と「性別」、「年齢」、「居住地」に関してクロス集計したものである。前節で検討してきた先行研究では、「シニア万博」（加藤，2006）など、「年齢」とリピーター率の関係が指摘されていたが、表26からも明らかのように、リピーター率は「年齢」、「居住地」とは有意な関係にないが、性別に関しては、女性のリピーター率の高さを示すものとなっている。今回実施した調査からは、地元住民の、特に女性のリピーター参加の高い状況を示すものとなっている。

さて、多くの参加者を集めた愛知万博であるが、その会場内での「万博」経験はどのようなものであっただろうか。次に、この点について詳しくみておきたい。

3-5. 「万博」はどのように経験されたのか？

こうした中で、万博参加者の満足度はどのような状況だろうか？

表27：パビリオン全般への評価

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
満足した	60.9	59.1	72.8	47.4
満足しなかった	9.7	16.1	8.1	22.5
どちらでもない	28.2	24.1	19.3	29.1
DK.NA.	1.5	0.7	0.0	0.9

注：単位は%

どの調査でも、パビリオン全般に対しては概ね満足度が高い。

表28：イベント全般への評価

イベント全般	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
満足した	30.1	49.6	48.4	30.5
満足しなかった	13.2	12.4	11.2	19.2
どちらでもない	55.5	35.4	40.1	48.8
DK.NA.	1.5	2.6	0.2	1.4

注：単位は%

「万博」はどのように経験されたのか？—長久手町住民意識調査を中心に—

イベントについては両義的な評価である。長久手町住民、長久手南小学校保護者という地元住民の半数が満足と高い評価であるが、全体的に「どちらでもない」という評価の高さも目に付く。

表29：国際交流全般への評価

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
満足した	31.9	32.8	45.6	22.1
満足しなかった	16.9	15.3	9.3	20.2
どちらでもない	50.2	48.5	45.1	56.8
DK.NA.	1.2	3.3	0.0	0.9

注：単位は%

国際交流についても、どの調査においても「どちらでもないが」約半数となっており、両義的な評価である。

表30：外国人との交流

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
有	39.6	28.5	34.1	20.7
無	59.1	70.1	61.6	79.3
DK.NA.	1.6	1.5	4.3	0.0

注：単位は%

実際の外国人との交流についても、半数以上が「なし」である。この点が万博における国際交流全般に対する評価と関連しているのかもしれない。

表31：環境面全般への評価

	県大生	長久手町民	南小保護者	白鳥小保護者
満足した	21.8	48.5	52.3	45.1
満足しなかった	26.8	15.0	10.0	11.7
どちらでもない	50.0	34.3	37.7	42.3
DK.NA.	1.7	2.2	0.0	0.9

注：単位は%

また、環境面全般への満足度は、愛知県立大学生以外、約半数が満足している。愛知県立大学生の環境面での評価の低さが目立つが、これは先に指摘しておいたように、通学時の経験が込められたものと考えられる（愛知県立大学地域連携準備室編，近刊）。

なお、この点に関する長久手町民による代表的な自由回答の結果を拾ってみると、「私自身が、環境問題を考え直す良い機会になった。」、「環境への取り組みを知るきっかけになった。」、「環境を訴えるものがあつた。」という語りに示される高い満足度を見て取ることができる。逆に環境面に対するネガティブな評価としては、「環境をテーマにしたはずの万博なのに、どんどん環境が破壊されていくのを目の前にしてショックでした。」、「長久手の自然（大きな里山）が破壊され、大駐車場になり、車が町内を走り、渋滞が生活道路でもあつた。」などの声が上げられていた。「万博」の理念である「環境」の評価とともに、生活実感としては、環境破壊も認識されているのだ。

以上の結果をまとめておこう。「万博」での経験については、いずれの調査でも満足度が高くなっている。その中でも特に目立つのは、長久手町住民において、「万博」に対する評価が高いものとなっている点だ。実際に万博に行った人の数や、リピーターも圧倒的に多く、加藤（2006）が指摘するように、「万博」での満足度の高さも、こうした近隣の住民によって支えられているものだと考えられる。

ただし、全体的に「どちらでもない」というアンビバレントな評価も目立っている点にも注意しておきたい。全体としては「万博」経験に高い満足度が得られているのだが、具体的に何が満足度を高めたかという点については今ひとつ明確になっていない部分があるのだ。この点についても最後の考察においてまとめて議論したい。

3-6. 「万博」経験と地域

最後に、「万博」の地域への影響に対する意識をみていこう。万博後、どのような地域の動きが現れているのかという点について、長久手町も調査を実施している。この調査はホームページや町内公共施設でチラシを設置して、町内在住者、在勤者、在学者を対象に、万博理念継承、発展のための住民の意見を募

集するというものである（長久手町編，2006:168）。ここでは、①環境保全・循環型社会の実現、②NPO、ボランティアなどの支援と育成、③地域からの芸術・文化の発展、④東部丘陵線「リニモ」の活用促進についてなどの声が紹介されている。こうした点について、長久手町で万博が開催されたことがどのように評価されているのだろうか。今回実施した長久手町住民アンケート結果から見ていきたい。

表32：長久手町のイメージアップにつながった

	そう思う	ややそう思う	あまり思わない	思わない	DK.NA.	計
度数	141	76	59	13	3	292
%	48.3	26.0	20.2	4.5	1.0	100.0

「万博」による長久手町のイメージアップについては、「そう思う」48.3%、「ややそう思う」26.0%と非常に高く評価されていることがわかる。

表33：長久手町の地域振興につながった

	そう思う	ややそう思う	あまり思わない	思わない	DK.NA.	計
度数	81	105	87	16	3	292
%	27.7	36.0	29.8	5.5	1.0	100.0

同様に「万博」が長久手町ので地域振興につながったという評価も、「そう思う」、「ややそう思う」合わせて6割を越えている。

表34：住みよいまちづくりにつながった

	そう思う	ややそう思う	あまり思わない	思わない	DK.NA.	計
度数	53	100	109	26	4	292
%	18.2	34.2	37.3	8.9	1.4	100.0

しかし、「万博」が住みよいまちづくりにつながったのか、という点については評価が大きく分かれている。「万博」経験の高い評価が、「住みよいまちづくり」に対する評価に必ずしも結びついていない事実が浮かび上がってくる。これは、「長久手町が日本中に知られるようになったとは思いますが、まちづくりは特

に何も変わっていないように思う。」「長久手町という町の知名度はあがったと思うが、それによって長久手町に住んでいてこんな風に良くなった、と感じることはそれほどない。」という自由回答での声からも見て取ることができるだろう。また、「長久手町には、大きなプラスになったと思う。新しい路線もでき、移動のしやすさは長久手町には大きなプラスである。高速の長久手出入口が出来たことも一つのメリットである。100円をとらなければ。」という評価の声がある一方で、「スクラップ&ビルドの土木的公共事業の側面がどうしてもあらわれてしまう。たとえばリニモの住民負担、見通しの甘さ。」という声や、「きれいな町になったとは思いますが、その分、自然は破壊されていったように思う。」という実感も存在している。特に自然環境や生活環境の悪化という実感が、「住みよいまちづくり」に対する評価が半数にとどまっている理由の1つと考えられる。

また、「市民参加」についてはどう評価されているのだろうか。

表35:町内や校区で一緒にする行事（寄付、清掃など）への参加

	よく参加する	ある程度参加する	あまり参加しない	ほとんど参加しない	DK.NA.	計
度数	31	117	62	80	2	292
%	10.6	40.1	21.2	27.4	0.7	100.0

地域での行事への参加率は約半数である。

表36：現在、ボランティア活動への参加

	参加している	参加したことがある	参加したことはない	あまり関心がない	DK.NA.	計
度数	25	81	137	43	6	292
%	8.6	27.7	46.9	14.7	2.1	100.0

その一方で、調査時点でのボランティア参加は8.6%と乏しい。また、ボランティア参加経験者も27.7%である。このように、イメージや理念としての「市民参加」に対する評価は高いのだが、実際の地域での「参加」は必ずしも実現し

ていない点も指摘しておきたい。

4. 考察

以上、愛知万博後の「万博」に対する評価や経験について、主に長久手町住民調査のデータを中心に分析してきた。ここでの知見を大きくまとめるとすると、「万博」の「成功」の語りを裏付けるものとして解釈できるかもしれない。しかし、同時に、データや自由回答の行間から浮かび上がってくる、もう1つの「万博」経験を指摘することができると思われる。こうした知見について、①経済効果、地域振興、②環境意識、③市民参加、④総合的な「万博」経験の4点からまとめて考察しておきたい。

第1に、経済効果、地域振興については、「長久手町のイメージアップにつながった」という評価が約3/4を占めている一方で、「住みよいまちづくりにつながった」とする評価は半分にとどまっている。社会資本整備を評価する一方で、環境破壊、生活環境の悪化が認識されているのだ。このように、「万博」経験と、実際の生活レベルの乖離を指摘することが可能であろう。

第2に、「環境意識」については、「環境意識」の高まり、環境行動への影響が評価される一方で、会場となった地元周辺地域の自然環境と生活環境の破壊が危惧されている。これは一見すると矛盾する結果ではあるが、「万博」のイメージとしての「環境」と生活実感レベルでの「環境」の認識の乖離を読みとることが可能だろう²⁰⁾。

第3に、「市民参加」については、全体的に高く評価されている一方で、必ずしも地域での「参加」とはなっていない点も注目される。「市民参加」についても、住民自身の日常的な営みにおける「参加」というよりも、「万博」というイベントで経験された1つのイメージとして存在していると考えられる。

第4に、「万博」に対する満足度の高さの一方で、パビリオンや、会場での評価が大きく分かれている。これは、「万博」での経験そのものも、その中身を問いつめていけば、あいまいな評価となっていることを示している。

以上の知見から浮かび上がるのは、「万博」に対する極めて両義的な評価である。非常に抽象的なレベルでは、「環境意識」、「市民参加」などが高く評価され

ている。その一方で、実際の自然環境、生活環境の破壊についてはネガティブな評価を下し、「市民参加」の実態も、実感も存在していないかのように見受けられる。この点が、今回の愛知万博においてどのように「万博」が経験されたのかという点を考える上で、無視できない特色であると思われる。

最後に、今回の調査データの分析はまだまだ単純集計レベルにとどまり、その端緒に過ぎない。以上の考察結果を踏まえつつも、今後追加の調査を実施し、さらなる分析・考察を継続していきたい。

<注>

- (1) 本稿は、愛知県立大学地域連携準備室編（近刊）所収の拙稿の一部をもとに、大幅に加筆修正を加えた上で改稿したものである。本調査のより詳細な集計結果、分析結果については同報告書を参照いただきたい。なお、本報告書を希望される方は、部数に限りはありますが、matumiya@lit.aichi-pu.ac.jpまでご連絡お願いいたします。
- (2) 万博調査結果をまとめる上で、筆者自身のよって立つ位置について述べておくことが必要かもしれない。万博とのかかわりとしては、いくつか関連のイベントでボランティアとしてかかわったものの、個人的には閉会間際の2005年9月17日の午後に半日参加したのみである。また、勤務地でもあり、居住地でもある長久手町とは、「長久手町まちづくりセンター運営委員」を2004年10月から2005年3月につとめた以外は、それほどかかわりを持っていたわけではない。その意味で、『外部』という『安楽椅子』に安住』（町村，2005:6）した立場からの批判と受け止められるかもしれない。長久手町住民調査実施の際にも、筆者が「おもてなし」ボランティアに参加していないので、調査に協力することができないという旨のお断りのお手紙をいただいたこともあった。これは、筆者が「万博」を研究する立場についての反省点と言える。
- (3) 愛知万博の剰余金129億円の半分、64億5千万円が地元への割り当て分となった。配分先は、愛知県に30億円、名古屋商工会議所と環境技術見本市に4億円ほか、市民団体やNPOの環境保全活動に10億5千万円が配分される方針である（『朝日新聞 朝刊』2006年4月28日）。万博会場跡地も万博のテーマ「自然の叡智」の理念継承するため、長久手会場跡地に45億円程度の事業費による全天候型イベント施設である「地球市民交流センター」を目玉に、「愛・地球博記念公園」として整備する方針である。また、愛知県は、万博の剰余金として分配される30億円のうち、15億円を整備費に、10億円程度をボランティア、エコ活動など市民活動支援にあてる方針をうちだしている（『朝日新聞 朝刊』2006年9月9日）。愛知県内の市町村でも万博理念の継承の事業が活発である。名古屋市は、名古屋城の本丸復元や東

山動物園の再生を含めて「ポスト万博」4構想を打ち出している（『朝日新聞 朝刊』2005年9月27日）。2006年度事業としても、岡崎市の「子ども芸術大学」事業（200万円）、瀬戸市の「まるっとミュージアム」事業（3,065万円）、春日井市愛知万博継承事業（27万3千円）、碧南市クロアチアとの姉妹都市提携事業（965万5千円）、豊田市「花やか豊田プラン」（6,900万円）、安城市都市農村交流イベント（80万円）、蒲郡市「観光ビジョン」負担金（1,000万円）、小牧市姉妹友好都市との交流事業等（1,974万2千円）、東海市姉妹都市締結への調査団派遣（420万円）、知多市友好都市提携事業（296万3千円）、尾張旭市「市民活動支援室」設置（643万円）、日進市国際交流事業（741万円）など目白押しだ。会場となった長久手町も18年度一般会計当初予算案では、前年度当初予算費で6.1%増やし、万博理念の継承事業や「田園バレー事業」の推進がうちだされている（『朝日新聞 朝刊』2006年2月18日）。その中でも環境、国際交流の活動を行う住民への助成枠計200万円が設けられたことは、万博理念の推進と市民活動の推進という、まさにその「継承」の事業といえよう。その後、長久手町では、万博理念の継承への提言として、①環境保全・循環型社会の実現、②国際化への対応、③地域からの芸術・文化の発展、④NPO、ボランティアなどへの支援・育成、⑤ハートフル社会への対応（<http://www.town.nagakute.aichi.jp/sosiki/kikaku/teigen.asp>）がうちだされている。

- (4) こうした批判については、前田（2005）、糸土・青木・加藤・影山（2006）、海上の森を守る会（2006）などがある。特に、財政をめぐる問題については、早川（近刊）が重要な実証分析を行っている。
- (5) 万博開催前、開催中、開催後の「万博」をめぐる出来事の概観、および「万博」をめぐる研究成果のレビューについては、愛知県立大学地域連携準備室編（近刊）を参照されたい。
- (6) 『朝日新聞 朝刊』2005年9月25日。
- (7) 万博に対するトヨタの影響についてはいくつか議論が積み重ねられている。「万博を利用したトヨタの見本市」（鎌田，2005:232）というネガティブな評価があるものの、全体的にはトヨタがかかわった万博への賞賛が主流である（日本経済新聞社編，2006）。この点を適切に分析したものとして、吉見俊哉の仕事から引用しておきたい。吉見は、愛知万博は、「結局のところトヨタ博となり、市民博となり、そしてまだなお環境博でもあるという三層の屈折を帯びて開かれつつある」（吉見，2005:259）と指摘する。「愛知万博が紆余曲折をへて、いつの間にか『国』の万博からむしろ実質的に『トヨタ』の万博になっていたことは象徴的である。開発主義的な経済政策や戦後国家の万博開催のシステムが破綻した後に主役として登場してくるのは、必ずしも市民の新しい政治だけではない。むしろそうした市民的な連帯の広がりよりもはるかに強力な動きとして、グローバルな市場、その動向を左右する巨大企業が公共的な文化においても支配的な影響を及ぼしはじめている」（吉見，2005:277）のだ。
- (8) 『中日新聞 朝刊』2006年5月30日。

- (9) http://www.expo2005.or.jp/jpn/about/post/post_e3.html.
- (10) http://www.expo2005.or.jp/jpn/about/post/post_e1/e1_rst.pdf.
- (11) 『朝日新聞 朝刊』2006年9月25日。
- (12) 『朝日新聞 朝刊』2006年4月21日。
- (13) 『朝日新聞 朝刊』2005年9月23日。
- (14) 『中日新聞 朝刊』2005年11月6日。
- (15) 『中日新聞 朝刊』2006年1月8日。
- (16) 『中日新聞 朝刊』2006年1月18日。
- (17) 『朝日新聞 朝刊』2006年9月24日。
- (18) http://www.expo2005.or.jp/jpn/about/post/post_b/post_b2.html。なお、大阪万博における経験については、片岡（2002）で概要をつかむことができる。
- (19) なお、長久手南小学校保護者、白鳥小学校保護者の回答者のうち、女性がそれぞれ91.1%、90.6%を占めている点を断っておきたい。
- (20) この点について成元哲は、「『地球環境』を市民一般の関心に繋ぎとめるスペクトルとしての『愛・地球博』は、「生のそれぞれの局面から分離され、それだけ別に取り出された擬似的な世界であり、単なる凝視の対象でしかない」、「非一生の自律的な運動」と指摘している（成，2005:324-325）。この成による「万博」分析は、住民側の「万博」と「環境」をめぐる経験に対する重要な視角を提供するものと言えよう。

<文献>

- 愛知県県民生活部広報広聴課，2006，『平成17年度第5回県政モニターアンケート報告書』。
- 愛知県国際推進局編，2006，『2005年日本国際博覧会愛知県記録誌』。
- 愛知県立大学地域連携準備室編，近刊，『愛知県立大学地域連携センター研究報告』1。
- 伊藤達雄，2005，「いま名古屋が熱い」『地理』50-5,6:64-69,100-106。
- 糸土広・青木秀和・加藤徳太郎・影山健，2006，「愛・地球博が残したモノ」『月刊むすぶ』423:10-21。
- 宇佐見大司，2006，「愛知万博が残したもの」『歴史地理教育』695:80-85。
- 大前純一編，2006，『地球、そこが私の仕事場』海象社。
- 小川巧記ほか，2006，『地球大交流』東急エージェンシー。
- 海上の森を守る会，2006，「宴の後・愛知万博を開催した皆さまにお尋ねします」『月刊むすぶ』422:12-15。
- 片岡えみ，2002，「変わりゆく夢のかたち」，一橋大学社会学部町村ゼミナール編所収。
- 片木篤，2005，「愛知万博の都市計画・建築」『C & D』140:22-23。
- 加藤徳太郎，2005，「『愛知万博』まやかしのゴミリサイクル」『月刊むすぶ』419:23-24。

- 加藤晴明・岡田朋之・小川明子編，2006，『私の愛した地球博』リベルタ出版。
- 鎌田慧，2005，『痛憤の現場を歩く』金曜日。
- クリスティーヌ・マリ，2006，『愛・LOVE・フレンドシップ』中日新聞社。
- (社)中部経営情報化協会編，2005，『ポスト「万博、空港」を考える』唯学書房。
- 鈴木孝美，2005，「博覧会を契機に大きく変わった歴史のまち長久手」『新都市』59(9):130-133。
- 芹沢俊介，2005，「『人と自然の共生』は達成されたか」『遺産』59(6):20-23。
- 成元哲，2005，「リスク社会における生の政治」，町村・吉見編著所収。
- 豊田市総合企画部国際推進課編，2006，『そして未来へ』。
- 中日新聞社・U F J 総合研究所編，2005，『東海エリアデータブック2006』中日新聞社。
- 辻淳夫，2005，「愛知万博は『環境万博』だったか」『C & D』140:20-21。
- 長久手町編，2006，『長久手町2005年日本国際博覧会万博関連事業報告書』。
- 長久手町史編さん委員会編，2002，『長久手町史 本文編』長久手町役場。
- 名古屋市商工会議所，2005，『私たちの愛・地球博』。
- 名古屋市総務局国際博覧会推進部国際博覧会推進室編，2006，『「愛・地球博」名古屋市公式記録』。
- 日本経済新聞社編，2006，『「強い名古屋」の未来』日本経済新聞社。
- 早川鉦二，近刊，「愛知万博、中部国際空港と愛知県の『危機的な財政状況』」『愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・国際学編）』39。
- 一橋大学社会学部町村ゼミナール編，1999，『博覧会をめぐる「地元」の社会学』。
- 一橋大学社会学部町村ゼミナール編，2002，『愛知万博 海図のない航海』。
- 一橋大学社会学部町村ゼミナール編，2005，『愛知万博と向き合う』。
- 前田栄作，2005，『虚飾の愛知万博』光文社。
- 町村敬志・吉見俊哉編著，2005，『市民参加型社会とは』有斐閣。
- 吉見俊哉，2005，『万博幻想』筑摩書房。
- 渡邊宗徳，2006，「愛知万博と観光まちづくりについて」『新都市』60(1):69-73。

<付記>

本研究は、2005年度愛知県立大学地域連携準備室における研究成果、および、2006年度科学研究費補助金若手研究（B）「地方都市におけるソーシャル・キャピタル構築プロセスの実証的研究」（研究代表者：松宮朝）による研究成果の一部である。

<謝辞>

調査にご協力いただきました愛知県立大学、長久手町、長久手南小学校、白鳥小学校のみなさまには、この場をかりて、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

また、調査、データ入力、集計作業は、下記の学生諸氏のご協力の成果です。心よりお礼申し上げます。

愛知県立大学文学部社会福祉学科 楠友梨子氏 岡あゆみ氏 林花衣氏 石井真由美氏
森千尋氏 奥野正樹氏 榎合美穂氏 濱地祥子氏 田中麻美氏 安江あかね氏 川上由美子
氏 深川郁恵氏 稲垣雄介氏 中島祐樹氏 武島吏沙氏 塚本悟詞氏 指田歩惟氏 長畑絵
里香氏 土谷桂子氏 愛知麻里氏 中道紗希氏 一宮望美氏 田口喜朗氏 小池里奈氏 中
尾沙織氏 木村由香里氏 早川綾乃氏 文学部英文学科 青木恵里氏